

『古今集遠鏡』受容史

田 中 康 二

一、本居宣長と古今集

本居宣長は青年期に医術の修行のために京都に留学するが、その地で学んだことは漢学や医学だけでなく、日本文学に関する造詣を深めたことが特筆される。とりわけ、契沖の著作との出会いが宣長の進路を決定した。『百人一首改観抄』との邂逅が宣長に古典文学研究の道に進むきっかけになったごとくであるが、それ以外に『勢語臆断』や『古今余材抄』もまた宣長の目を開かせる契機となった⁽¹⁾。

ここでは『古今集』について考えてみたい。閉鎖的で因襲的な伝統を重んじる「古今伝受」について、これを徹底的に批判する立場は生涯崩さなかったが、古今集そのものについては、これを尊崇する態度を持ち続けた。和歌史上の古今集の位置付けについて、宣長は次のように述べている⁽²⁾。

延喜ニ至リテ、此道大ニ行ハレ、ハジメテ撰集セラレタル古今集ナルユヘニ、和歌ノ道ニヲキテ、第一ニ古ノ風体ヲミ、ヨキ歌ノサマヲマナブニ、此古今集ヲ以テ規矩トスル事、末代迄カハル事ナシ。

古今集に対しては修学のはじめから、常にこれを尊重する態度をとり続けた。それは晩年に至っても変わらなかった⁽³⁾。

此集をば、姑く後世風の始めの、めでたき集とさだめて、明暮にこれを見て、今の京となりてよりこなたの、歌といふ物のすべてのをさまを、よく心にしむべき也。

古風である万葉集に対して、後世風である古今集という領分はあるものの、手本とすべき歌集としては古今集を第一と考えていたのである。宣長は賀茂真淵の薫陶により、本格的に万葉集を学ぶことになるが、そうなる前から古今集は歌を詠むために必要不可欠な歌集であるという考えが変わることはなかった。実際のところ、門弟への和歌指導のために古今集を用いている。次のように四回にわたって門弟を相手に会説をおこなったのである⁽⁴⁾。

第一回 明和七年一月二十六日ゝ明和八年十月八日（式日は八の日の夜）

第二回 安永三年一月二十四日ゝ安永四年十月十四日（式日は四の日の夜）

第三回 安永九年二月十日ゝ天明四年閏一月十日（式日は十の日の夜）

第四回 寛政四年十月八日ゝ寛政七年五月二十六日（式日は不定）

四回の講義は『源氏物語』の四回や『万葉集』の三回に並ぶ回数である。いかに『古今集』を重視していたかがわかる。

そういった古今集への執着を具現化したものが『古今集遠鏡』である。詳しい経緯は次節に譲るが、四回目の講義の前年（寛政三年六月二十日）には、門弟の横井千秋によるたび重なる執筆要請があったごとくである。最終的に刊行されたのが寛政九年正月であるから、随分と時間がかかったものだ。『遠鏡』は古今集所収歌のほぼすべてを口語訳

したものであり、歌を丸ごと口語訳するというのは画期的なことであった。宣長自身は初学者が修学する際の便宜を図るという意図を持っていたようであるが、それは単に初学者への便宜に留まらなかった。全文口語に訳するという方法によって、歌の内容がガラス張りとなり、歌の理解の深淺が顕在化したからである。語釈であれば難解な語や曖昧な表現は割愛するなり、適当にお茶を濁すなりすることもできるが、全文口語訳ではそういうわけにもいかない。ペンディングが許されないからである。最初から最後までとにかく訳さなければならないのである。

かつて論じたように、『遠鏡』による功績は古今集を全文口語訳したこともさることながら、雅語を俗語に翻訳するに際して、理論と方法と技術という相異なる三つのレベルで、それぞれにすぐれた成果をあげたことを指摘することができる⁽⁵⁾。翻訳論と翻訳法と翻訳術の三種類のアプローチは、学者としての厳密さと教育者としての配慮、そして歌人としての鑑賞力を兼ね備えた宣長にしてはじめて可能であったということができよう。

以上のように、『遠鏡』の成立と意義をまとめることができるが、本稿では『遠鏡』がどのように受容されたのかという観点から考えることにしたい。『遠鏡』は『遠鏡』を見るだけではわからない。物の本質はもちろんそのものの中にあるはずだが、それは簡単に見抜けるわけではなく、それがどのように受け取られるかということの中に見出される場合がある。つまり、受容史の中にこそ物の本質が見え隠れするのである。さまざまな角度から当てられた光によって、おぼろげながら結ぶ像を目を凝らして見極めたい。そのことによって、『遠鏡』の歴史的意義が明らかになるだろう。

二、剽窃疑惑―尾崎雅嘉『古今和歌集鄙言』

宣長が『遠鏡』を出版したのと同後して、類似の書籍が大坂で上梓されている。それは尾崎雅嘉の『古今和歌集鄙

言』である⁽⁶⁾。『鄙言』は古今集の序と所収歌を当時の口語に訳したもので、寛政八年正月に大坂の書肆柏原屋与左衛門から出版された。『遠鏡』よりも一年早い刊行である。宣長は『鄙言』が出版されるという噂を聞きつけると、これに剽窃の嫌疑を掛けている。門弟の伊達氏伴からの打診に対して、次のように答えている。

一、御尋之事、古今集ひな詞ハ、遠鏡をぬすみ候物ニ御座候。万葉緯ハ宜敷物ニ御座候。伊勢物語闕疑抄ハ細川幽斎作ニ候。さしたる事もなき物ニ而御座候。

これは寛政八年正月十四日付の書簡である。『万葉緯』や『伊勢物語闕疑抄』とともに『鄙言』にもコメントを付している。『万葉緯』は契沖の門弟である今井似閑による注釈書で、万葉集に関係する古歌を集成し、これに注を付したものである。また、『伊勢物語闕疑抄』は宣長も記すごとく、細川幽斎の伊勢物語注釈である。いずれも世に出てかなり経つ注釈書であり、宣長自身もコメントを付けているように、宣長も所有もしくは貸借している。ところが、『鄙言』は当時、実質的には未刊の書物であった。そのようなものに対して「遠鏡をぬすみ候物ニ御座候」というのは穏やかではない。『鄙言』を見ることもせずに『遠鏡』を盗作したものと判断したのである。宣長のこの判断は果たして正しいのであろうか。

『鄙言』が刊行された直後に、宣長は実子の春庭に次のように書き送っている。寛政八年九月十八日付書簡である。

古今集ひな詞板行出来候よし、植松、すり候を一枚持帰候由ニ而見せニおこし、見申候所、いよく遠鏡をぬすみ候様子ニ見え申候。遠鏡も板下四冊半程出来、追々遣申候。彫刻も段々出来候よし申越候。

「植松」とは、宣長の門弟で板木師の植松有信である。板木師という同業者ゆえの融通であろうか、書肆から一枚摺ったものを持ち帰って宣長に見せに来たというのである。それを見ると「いよゝ遠鏡をぬすみ候様子二見え申候」と記している。やっぱり『遠鏡』を盗作していたというのだ。宣長が植松有信から『鄙言』のどの丁を手渡されたのか不明であるが、順当に考えれば第一丁であろう。つまり、巻一春上の最初である。あまりにも有名な巻頭歌は次の通りである。

ふるとしに春たちける日よめる 在原元方

年のうちに春は来にけり一とせをこぞとやいはむことしとやいはむ（春上・一）

この歌に対して、『鄙言』には次のような訳が掲載されている。

冬のうちに又春がきた。これでハ、おなじ一年のうちの、きのふまでを、去年といふたものであらふか。やはりことしといふたもので有ふか。

これは『遠鏡』では次のようになっている。

○年^一内ニ春ガキタワイ コレデハ 同ジ一^一年ノ内ヲ 去^一年ト云タモノデアラウカ ヤツバリコトシト云タモノデアラウカ

この訳同士における関係性をどのように考えればよからうか。むろん『鄙言』も『遠鏡』もどちらも当時の京言葉に準拠して訳したものであるから、だいたい同じようなものになったとしても不思議ではない。現代でも注釈書の口語

訳同士がよく似ているのと同じである。だが、宣長はこの巻頭歌を見て、『鄙言』は『遠鏡』を参照しているはずだという確信を持ったに違いない。それというのも、宣長はこの巻頭歌の訳出については一家言持っており、わざわざ「例言（凡例）」において次のように触れているからである。

○歌によりて、もとの語のつゞきどま、てにをはなどにもかゝはらず、すべての意をえて訳すべきあり。もとの詞つゞき、てにをはなどを、かたくまもりては、かへりて一うたの意にうとくなくなることもあれば也。たとへば「こぞとやいはむことしとやいはむなど、詞をまもらば、去^レ年ト云ウカ今年トイハウカ、と訳すけれども、さては俗言の例にうとし。去^レ年ト云タモノデアラウカ今年ト云タモノデアラウカ、とうつすぞよくあたれる。

古語をそのまま逐語訳しても舌足らずな表現になってしまう。それゆえ、適宜言葉を補った方がよい場合がある。そのことを巻頭歌を例に説明しているのである。このような意訳の仕方は自分が編み出したものだ。それを無断で借用するとは言語道断である。宣長の憤りが伝わってくるようである。

また、この巻頭歌には二箇所傍線が付されている。これも宣長の工夫であつて、歌にない言葉を敷衍する理由を次のように説明している。

又かたへに長くも短くも、筋を引たるは、歌にはなき詞なるを、そへていへる所のしるしなり。そもくさしも多く詞をそへたるゆゑは、すべて歌は、五もじ七もじ、みそひともじと、かぎりのあれば、今も昔も、思ふにまかせず、いふべき詞の、心にのこれるもおほければ、そをさぐりえて、おぎなふべく、又さらにそへて、たすけもすべく、又うひまなびのともがらなどのために、そのおもむきを、たしかにもせむとて也。

三十一字で言い足りない言葉を補い、理解の助けのために添え、初学者向けに歌の趣意を伝えるために敷衍したというのである。これは文学研究者としての厳密さと教育者としての便宜に折り合いを付けた絶妙な手法と言つてよい。こういったスタイルも宣長が編み出したものである。単に気の利いた訳語を盗用されたというのではない。口語訳の技法に関する根源的な工夫を掠め取られたのである。宣長が雅嘉に盗作の嫌疑を掛けた根拠はこのあたりにあるのではないだろうか。

さて、さきの書簡にはこのあと『遠鏡』出版の進捗状況を書いているところから、焦りの色を読み取ることができ。まがい物に先を越されたのだ。同年十一月十九日付の春庭宛書簡にも同様のことが書かれている。次のようなものだ。

一、古今集ひな詞と申物六冊板本出申候。古今ノ歌を俗語ニ直し候物ニ而、此間一見いたし候へバ、手前之遠鏡を其ま、丸盗ミニぬすみ候物ニ而御座候。京地ニ而評判ハいかゞ御座候哉。承度存候。遠鏡も冬中ニハ板出来致シ、来春ハ早々板本出し可申候。校合ずり差越申候処、板も甚宜御座候。植松殊外いそぎ、細工人卅六人かけ申候而彫申候由申參候。

「六冊」とあるところから、今度は『鄙言』を全冊入手したのである。しかも、一通り目を通したようである。その上で「手前之遠鏡を其ま、丸盗ミニぬすみ候物ニ而御座候」と記している。『鄙言』は『遠鏡』の丸写しだということだ。すべてを見てからのことであるから、宣長なりにどのように判断する根拠があつたのであろう。興味深いことに、宣長は春庭に『鄙言』の評判を聞いている。春庭は当時、京に滞在していたからである。ますます宣長の焦りの色は隠せない。植松有信も『遠鏡』の上梓を版木職人たちに急がせていることくである。

『遠鏡』が刊行された後、今後は宣長は京大坂における『遠鏡』の評判を気にしている。以下の書簡に示す通りで

ある。

一、古今集遠鏡、やうやく此間板本出来参申候。殊外宜ク出来申候。売本ハいまだ不_レ参候。定而近々二京大坂などへも本出し可_レ申候。(寛政九年五月九日付春庭宛書簡)

一、遠鏡之儀、定而最早京大坂などへも廻り候半と奉_レ存候。評判いかゞ御座候哉。承度奉_レ存候。いまだ京大坂之評説一向承り不_レ申候。(寛政九年七月八日付植松有信宛書簡)

前者には、一日も早く『遠鏡』が販売されることを待ち望む旨の文言が見える。後者には、京大坂において、実際にどのような評判であるのかということ、書林関係者としての有信に打診しているのである。

一般に著作権の侵害ということは今に始まったことではない。それはこのような宣長の例を見れば明らかであるが、現代では著作権侵害の事実認定において、主として二つの要素を犯罪構成の要件としている。すなわち、類似性と依拠性である。似ているということとそれが真似をした結果であるという二つが同時に成立してはじめて、著作権侵害が立証される。酷似していても、一方があらかじめ他方のそれを入手して真似たということが立証されなければ、偶然の一致に過ぎないということになる。また、依拠したことがはっきりしていても似ていなければ、そもそも問題にならない。そのようなものはインスパイアやリスペクト、あるいはオマージュと呼ばれ、現代芸術においても創作上の重要なモチーフとなっている。問題は酷似しており、それが依拠した結果であるにもかかわらず、そのことを言わずにいるということである。

言うまでもなく類似性は似ているかどうか、ということが客観性を伴った判断による必要がある。宣長の場合、端的に言えば先に指摘した意識の手法に関する独自性を指摘することができる。これは宣長のオリジナルである

というわけである。そのほかにも多くの客観的類似性を指摘することができるだろう。では、もう一つの依拠性はどうか。尾崎雅嘉が宣長の著作を入手する可能性はあったのか。

現代でもブライオリティーを証明するために用いられるのは、それが構想段階から丹念に記された記録である。実験日誌や日記などがそれに相当する。宣長の場合も『遠鏡』の稿本というのが残存しているが、それほど年次をさかのぼることができない。それというものが、『遠鏡』は門弟からの依頼で一念発起したものであるが、その時には他にしなければならぬことが重なって、なかなか着手できなかったからである。だが、都合の良いことに、そのことを詫びる書簡が残されているのである。

一、かねて蒙^レ仰候古今集之義、御余掌申ながら、殊外多用故段々と延引仕り、今ニ得取掛り不^レ申、甚延引之段真平御高免可^レ被^レ下候。其内取掛り、少々ツ、成共返上仕候様ニ可仕^レ候。(寛政三年六月二十日付横井千秋宛宣長書簡)

名古屋の門弟である横井千秋が、再三にわたって「古今集之義」を執筆要請しており、少しずつ取り掛かっているというのである。寛政三年にはすでに着手していたのだ。「古今集之義」が古今集の口語訳であることは、翌年に出された次の書簡との整合性から考えて明らかであろう。

一、兼々蒙^レ仰候古今集訳之義、取掛り段々訳し申候。夫ニ付、打聞冬ノ部迄参有^レ之候処、其次恋雑ノ部も不^レ殘御越し被^レ下候様ニ仕度候。夫ニ付、春ノ部ハもはや相済申候へ共、又々前後見合せ考申候事有^レ之候故、春ノ部も得返上不^レ仕候。且又訳ノ義も、追々出来次第入^ニ御覽申度候へ共、是又全部出来之上ニ而、前後又々考合せ候義多候故、少々も得入^ニ御覽不^レ申候。何様不^レ遠内全部出来次第、さし上可^レ申候。(寛政四年十月三十日付横井千秋宛宣長書簡)

古今集の口語訳に取りかかっている由である。「打聞」とは賀茂真淵『古今集打聴』のことであり、これを解釈の参考にするというわけである。なお、『遠鏡』は契沖『古今余材抄』と真淵『古今集打聴』を基本文献としている。少しずつではあるが、訳出を進めていることがわかる。翌年には次の文面が見える。

一、古今集遠鏡之儀、仰之御趣承知仕候。此節ケ様之義もいまだ一向ニ得取掛り不_レ申候。(寛政五年五月十六日付横井千秋宛宣長書簡)

寛政五年には「古今集遠鏡」という書名も決まっていたようである。ただし、本格的に取り掛かることができずにいる旨が記されている。だが、この年の秋に急転直下、事態が進展し出す。

近頃ハ春上京後、ひたと古今集訳ニ打か、り罷在り、記伝ノ下巻へも、いまだ一向ニ得取り掛り不_レ申候義ニ御座候。古今集訳清書、半分計出来仕候。大方当月中来月上旬迄ニハ、不_レ残出来可_レ申候間、出来次第早々入_レ御覧_{可_レ申候}。左様思召可_レ被_レ下候。(寛政五年八月十一日付横井千秋宛宣長書簡)

宣長が上京したのは同年三月十日で、帰郷したのは四月二十九日のことである。京では妙法院宮に拝謁した。その間、大坂や名古屋に足を伸ばし、門弟たちと交流した。そのような交流も一段落して、『遠鏡』の執筆に取りかかる余裕が出てきたのであろう。同年の冬には出版計画までもが転がり出す。

一、古今遠鏡愈御蔵板ニ被_レ仰付、早速御彫刻可_レ被_レ成旨被_レ仰下、殊更記伝之通り上彫ニ可_レ被_レ仰付_一由、別而大慶仕候。(寛政五年十一月十一日付横井千秋宛宣長書簡)

『遠鏡』の摺筆とその後の出版計画によって、宣長は年来の肩の荷を下ろす思いだった。『古事記伝』と同じように上梓することによって安堵した。千秋は『古事記伝』出版の功労者でもあったのである。熊本の門弟長瀬真幸に次のような書簡を送っている。

一、古今遠鏡、漸脱稿仕、此節尾張へ遣し申候。近々上木ニ相成申候積ニ御座候。(寛政五年十一月十五日付長瀬真幸宛宣長書簡)

「尾張」とは尾張藩士を勤めた横井千秋のことと考えて間違いない。稿本を千秋に託したのは、他ならぬ出版のためである。

一、遠鏡板下之儀、外二宜キ筆者思召付御座候由、被_レ仰聞_二候御趣承知仕候。いかやう共御もやう次第、可_レ然様ニ御取計可_レ被_レ下候。(寛政六年正月十日付横井千秋宛宣長書簡)

このように宣長は脱稿した『遠鏡』を千秋に託し、これを清書してくれる筆耕を見繕ってもらうことにした。こうして順調に事が運ぶかに思われた。ところが、思わぬところで障りが出た。稿本を閲覧した千秋が、俗語訳だけでは満足せず、注解を挿むことを提案してきたのである。さすがの宣長もこれに賛同することはできず、次のような返事をしている。

一、遠鏡二冊被_レ遣、此度返上仕候。右二冊之内、所々御考之御入_レ紙一々拝見仕候。惣体此書ハ注ニ而ハ無_二御座_一。只訳を主と致し候事故、注ハ加ヘ不_レ申、其内格別之事アレバ、たまたまハ注ノ如キ詞も加ヘ申候ヘ共、先ハ注ハ加ヘ不_レ申候積り

也。心得ニ可レ成事共を加フル時ハ、殊外事長く相成候故、先注ノ如キ事ハ加ヘ不レ申候。夫故此度之御入紙之分も多くハ略キ申候。其内ニ朱ニ而△印付申候分ハ、細書ニ御書加ヘ可レ被レ成候。右之印無レ之分ハ、御捨被レ成可レ然奉レ存候。尤細書ニト申候わけハ、此書貴公様御方ニ而御上木被レ成候事故、貴公様御自分ニ御書加ヘ被レ成候事故、細書ニト申候也。（寛政七年正月二十日付横井千秋宛宣長書簡）

千秋が返却してきた『遠鏡』には、千秋の注解が随所に書き入れられていたのである。宣長はこれが口語訳の書物であると述べ、通常の注釈ではないと強調した。そうはいってもすべてを捨てるのは忍びなく、最小限の注を採用することにしたという。版本に残る千秋注は、宣長の目を通つて厳選されたものなのである。このように釘を刺しても千秋の注の増補は収まらなかつた。宣長は情理を尽くして加注を控えるように千秋に苦言を呈したこともあつた⁽⁷⁾。それに加えて、千秋は寛政七年秋には病氣にかかつてゐる。しばらくして快癒したようであるが、還暦に近い年齢での病は十分な静養が必要であらう。出版することが決まったにもかかわらず、製版作業が一向に進まなかつたのは、そのような事情が複合的に絡み合つた結果であると考えられる。

『遠鏡』脱稿の噂は門弟の間を駆け回つてゐた。『鄙言』の問い合わせをしてきた伊達氏伴もその一人で、是非見せてほしいと依頼してきたのである。そこで宣長は次のように答えている。

遠鏡御求被レ成度候由、書林へ申付為レ写可レ申旨、御紙面之通致ニ承知候。写本出来次第指進可レ申候。（寛政八年三月二十四日付伊達氏伴宛宣長書簡）

書肆に命じて『遠鏡』の副本を作らせようと約束したのだ。同年六月には伊達氏伴が『遠鏡』の写本を落掌する手はずが整つた由である⁽⁸⁾。それと同時に並行で『遠鏡』の板下も作られていった。板下が全部出来上がったのは寛政八年

十月二十五日である⁽⁹⁾。

さて、先述のように『鄙言』刊行のニュースがもたらされ、さすがの宣長も動搖を隠しきれないごとくであった。『遠鏡』の刊行が遅々として進まなかつた間、『遠鏡』には写本が作られ、伊達氏伴に渡った。それは『遠鏡』が門弟に必要とされていたことを意味する。版本になる前に写本が流通するのはよくあることと言ってよからう。

しかしながら、『遠鏡』の副本は一部だけではなかつたのである。たとえば、浜田藩士の小篠敏は寛政五年中に、次のようなことを宣長に伝えている。

一、古今集疑問、毎々御面倒奉_レ恐入候。古今俗訳相成候事二候ハバ、拝借仕度奉_レ存候。人々二勸申度奉_レ存候。私歌よめ不_レ申候間、若手之衆二勸申度念願二御坐候。(寛政五年某月某日本居宣長宛小篠敏書簡)

いまだ「遠鏡」と呼ばれる前の「古今俗訳」の時代の話である。「古今俗訳」を貸してほしいというのである。これは借用依頼の文面であるが、小篠敏が借り出したという証拠は『借書簿』に残されている。それによれば、寛政七年八月二十五付で貸し出されている。それは村田春海の手にも渡つたようで、春海の宣長宛書簡には次のような文面がある。

遠鏡も、浜田侯ノ御本ヲ、伝ヲ以拝借仕候而、半分程拝見仕候。さて／＼めづらしき御説ども、欣躍仕候事二御座候。序中相おひノ詞ノコト、恵慶法師家集ニ、子日の所といふ題にて、

ふた葉よりあひおひしても見てしがなけふちぎりつる野べの小松と

此歌ノあひおひ、全相追ノ義と見え申候。益御説ノたしかなる事を奉_レ感服_レ候。(寛政八年六月二十五日付宣長宛村田春海書簡)

これによれば、江戸在住の村田春海が『遠鏡』を入手している。それは「浜田侯ノ御本」であるという。浜田侯とは浜田藩主松平康定侯であり、藩士の小篠敏を宣長に入門させ、松坂に留学させる程の好字の大名として著名であった。ということは、「浜田侯ノ御本」とは、小篠敏が入手した『遠鏡』の写本、あるいはその転写本であると考えてほぼ間違いないだろう。このようなルートで門弟外の春海の許に、写本『遠鏡』が流れ着いたということである。

もちろん、春海が写本『遠鏡』を大坂の尾崎雅嘉に渡したということではない。寛政八年六月には『鄙言』はすでに出版されていた。春海の『遠鏡』入手は、当時における国学者同士の情報化社会にあつては氷山の一角だということである。事ほど左様に写本『遠鏡』が何らかのルートで尾崎雅嘉の許に届いたと考えることができる。もちろん状況証拠を積み上げたに過ぎないけれども、類似性とも相俟って依拠性に関してもグレーと言わざるを得ない。

なお、『遠鏡』と『鄙言』に対する雅嘉の認識を知ることができるものがある。享和二年刊の『群書一覽』である。当該書は二千数百部に及ぶ国書の総合的な解題である。そこに『遠鏡』と『鄙言』についての解題が掲載されている。次のごとくである。

古今和歌集鄙言^{ヒナコトバ} 六卷 尾崎雅嘉

古今集の歌を俗語に訳して頭書とす。その意^{コトバ}のもつぱら契沖の余材抄にしたがひ、かたはら頭註密勘^{セツ}の説をとれり。注釈^{チュウシヤク}の書を見てわきまへがたくする児女^{コナメ}の一覽^{イチバン}して、そのおほむねをさとるべきたよりとす。

古今和歌集両序鄙言^{カナマナ} 二卷 同上

仮名序真字序ともに俗語に訳し、故ある事どもはそれ^{コトバ}の書を引て同じく俗語を以て注釈^{チュウシヤク}す。真字序のよみくせは叶雲阿闍梨^{カヤウンシアジャリ}自筆の巻をうつせり。

古今集遠鏡 六卷 本居宣長

此書ももつぱら俗語を以て歌を訳し、所々に一二三のしるしをつけて、その詞を上下に置かへて説^{トキ}たる歌有。長歌は訳^{ワキ}を省^{ハク}け

り。又余材抄打聴^{ウチギ}等の説をうけがはざる所には、余材わろし、打聴わろしなどことわれり。卷首に木綿苑千秋序、次に凡例ありて、数十条の訳例^{ウチギ}を挙たり。

両書について、その内容と特徴を簡潔にまとめていると言つてよい。一見すれば、両書の適切な解題と思われるが、『遠鏡』解題における「此書も」の「も」が妙にひっかかるのである。もちろん、刊行の順序によつて配列されていると考えられるので、類似の書物の二冊目について「此書も」とするのは当然といえる。だが、本節で確認した経緯を背景にすると、何とも割り切れない違和感がある。あたかも『遠鏡』が『鄙言』の類似品として刊行されたという印象を受けるのである。雅嘉からすれば、『群書一覽』の刊行によつて剽窃疑惑を払拭することができたのである。なお、『群書一覽』が刊行された時には、すでに宣長は没していた。したがつて、宣長は雅嘉の解題は知る由もなかったのである。

以上の検討によつて、『鄙言』は『遠鏡』よりも出版の年次は早いけれども、『遠鏡』の影響を受けて成立した著作の最初に位置付けることは見当はずれとは言えないであろう。

三、歌人の評釈―香川景樹『古今和歌集正義』

『遠鏡』が世に出て四十年近く経つて、香川景樹が『古今和歌集正義』を刊行した。天保六年秋のことである。同年に刊行された内容は、総論・序と春上下と夏までであり、景樹の生前に公にされたのはこれだけであつた。そもそも景樹は地下歌人の家であつた香川家に養子入りしたが、故あつて離縁した。小沢蘆庵の歌風に傾倒し、弟子入りしたことが旧来の公家歌壇との距離を生んだとも言われている。

この頃には全国規模の結社である桂園派を率いる、押しも押されぬ当代歌壇の第一人者であつた。しかも、景

樹の目指す歌風は古今集である。その上、地下歌人の先達である本居宣長の『遠鏡』は衰えない人氣があった。何といつても全文口語訳という画期的手法を取っているからである。そういった諸々の条件を鑑みて、景樹が古今集の注釈書を出さない理由がない。出版するからには、自説を普及させようと企てるであらう。派閥の勢力を拡大させるために最も有効な手段は、先行注釈に異を唱え、これを完膚なきまでに粉碎することである。それによって、先達に靡きかけていた者まで門弟に取り込むことができるからである。景樹が早い段階で賀茂真淵の著作『新学』・『百人一首うひまなび』を対象にして、これを批判する著作『新学異見』・『百首異見』を著したのは、そのような意図があったからである。学術書の出版の目的は自説の流布であると同時に、門弟の獲得という要素を多分に含んでいる。

そのような状況で、景樹がターゲットにしたのは、契沖『古今余材抄』・賀茂真淵『古今和歌集打聴』・本居宣長『古今集遠鏡』の三書であった。だから、『古今和歌集正義』は必ずしも『遠鏡』だけを対象にしているわけではない。また、『古今和歌集正義』は秋上下・冬が刊行されたのは嘉永二年、残りの巻を含めて全巻刊行されたのは明治二十八年のことであった。とりわけ没後の出版に関しては、それらが景樹の説を忠実に伝えるテキストであるかどうかという、根本的な問題がある。そこで、本節では香川景樹の生前に刊行されたものの中から『遠鏡』のみを組上に上げた歌を取り上げることにしたい⁽¹⁰⁾。

春上から順に取り上げていきたい。五一番歌である。

やまざくらわがみにくれば春がすみみねにもをにもたちかくしつ、（春上・五一）

こは峯にさき尾にさきたる花の推なべておぼろに見ゆるをいへり。峯にも尾にも花を立かくしつ、と四五の間に花の言を加えて意得べし。

○遠鏡に、山ノ桜ヲオレガカウ見ニクレバ霞ガ一面ニドコモカモ立テカクシテ花ヲ見セヌワイといへるは非也。かく一め

むに云々といへば、霞の方主になりて花はいづくにかとたどる意となれり。さては峯も尾もとなくては叶はず。峯にも尾にもと有を聞知べし。

景樹が問題にするのは、第四句「みねにもをにも」である。宣長はこれを「一面ニドコモカモ」と訳している。景樹はまずはじめに「峯にさき尾にさきたる花」と記しているように、ことさらにこの詞章に意を用いる。そして、宣長の解が間違っていることに言及するのである。それはこの歌全体の趣意に関わるものであるという。つまり、「花」が主か「霞」が主かという問題である。宣長のように霞が一面に花を隠しているとすると、霞が主体となつて花は客体に過ぎないことになる、というわけである。景樹の論拠ははっきりとしている。第四句は「峯にも尾にも」であつて、「峯も尾も」ではないということだ。「峯にも尾にも」である以上、花が峯に、そして尾に咲いているということを含意しているというのだ。それを「一面に」と訳してしまつては台無しで、歌全体の趣意にも反するというわけである。助詞の用法を根拠にして歌の趣意に迫る反論は説得力があり、景樹の解釈の方が妥当であると言つてよからう。

次に春下・一〇三番歌を見てみよう。

在原元方

霞たつ春のやまべは遠けれどふきくる風は花のかぞする（春下・一〇三）

霞こめたる山本はいと遙かなれど、猶そなたより吹わたる風にはなの香こそは匂へといふ。花は其山に咲たらん物にして、いかで遠きにこゝまでとはいぶかしむ方によめるが、はかなくてめでたき也。梅は散、桜は咲出らん頃ほひの山野の春色をいとなつかしくうつし出せり。次にふく風と谷の水としなかりせば云々、冬の部にも、此川にもみち葉ながる云々、などいへるも、花は深山がぐれに咲けん物とし、紅葉は奥山の也とさし定めてよめる、只近わたりの花紅葉ならんずらめど、皆

見わたしの打つけ心にをさなく思ひ入が歌となれるの雅情也。

○遠鏡に、霞ノ立ツテアル春ノ頃ノ山ハ遠ウ見エルケレドモカクベツ遠ホウナイカシテ吹テクル風ハ花ノ匂ヒガスルといへるは非也。遠けれど遠からず、遠けれど近ければやといふ語調あるべきならんや。遠く見ゆれど、なくては、さる心は出こぬ事也。即ちとけるに詞には遠ウ見エルケレドモといひなせり。又よし遠からずとも打わたしたる山の花の大やう匂ひくるものならず。況や長閑き春日ならんをや。

霞が立ちこめた春の山辺は遠いけれども、そこから吹いてくる風には花の香りがするの意である。景樹が問題にするのは第四句「遠けれど」である。宣長はこれを「遠ウ見エルケレドモ」と訳している。しかも、これに「カクベツ遠ホウナイカシテ」と付け加えているのである。これは逐語訳ではなく、ここには明らかに宣長の解釈が含まれている。景樹が指摘するのはそのことだ。和歌原文に「遠く見ゆれど」とでもなければ、このように解釈することはできないというのである。遠いけれども遠くなく、遠いけれども近いからでもあるうか、という解釈は無理があるからだ。景樹は宣長のこの解釈をきっぱりと否定する。花は山に咲いているものなのに、どうしてここまで遠いの花の香りがするのか、と不思議に思うと詠むのが、はかなくてすばらしいというのである。

しかも、そのように解釈するにはそれなりの根拠がある。景樹は古今集歌を証歌として立証する。「吹く風と谷の水としなかりせば深山がくれの花を見ましや」（春下・一一八・紀貫之）と「この川辺もみち葉流る奥山の雪げの水ぞ今まさるらし」（冬・三三〇・読人不知）を取り上げて、この歌との着想の共通点を指摘するのである。すなわち、花や紅葉は本当は近場のものであるにもかかわらず、花は「深山がくれに咲けん物」であるとし、紅葉は「奥山の」ものであると思い込んで詠むのが、目の前の光景が歌に変わる「雅情」であるというのである。つまり、近くのを遠くであるかのごとき体裁で詠むという歌の詠み方があったのであり、元方歌もそのような趣向で詠まれた歌である

と解すべきだと景樹は主張するのである。ということは、景樹は花が遠くにはなく、近くにあるということを確認する点で、大局的には宣長と同じことになる。だが、それを露骨に解釈に反映させることに疑義を呈するのである。遠くにあるのに、風が花の香を運んでくる、という不思議さ自体が趣意だからである。景樹の批判のポイントは、宣長の理に落ちた解釈なのである。

このように表現の細部に徹底的にこだわりながら、筋を通す解釈を用意し、しかもそのための証歌も周到に準備した。そこには、しなやかな鑑賞眼に裏付けられた、景樹の歌人としてのセンスが光っていると言つてよからう。

第三として、春下・一〇五番歌を見ることにしたい。

題しらず

よみひとしらず

鶯のなく野辺ごとに来てみればうつろふ花にかぜぞふきける（春下・一〇五）

是より六首は落花をむすべる鶯の歌也。鳴野べ毎に来て見ればといへるを思ふに、旅ゆく人などのよめりしならん。花の散ぬ野もなく、鶯なかな里もなき弥生の春色思ひやるべし。

○遠鏡に、二の句のごとといふ詞は下の句へかけて心得べし。来て見ればへはかゝらざる也といへるは非也。鳴のべごとに来て見ればといへる、引はなつべき句調ならんや。調べをしらぬの甚き者也。さりとて引つらねては聞えずはこそあらめ、さて事もなき歌なるをや。

景樹の宣長批判のポイントは、第二句「野辺ごと」に「がどこに掛かるか」という点である。『遠鏡』には「下の句へかけて心得べし。来て見ればへはかゝらざる也」と記されている。ただし、これは宣長の注ではなく、横井千秋の注である。参考までに宣長の訳をあげておくと、「鶯ノナク野へ来テ見レバ ドコノ野モウツロウタ花ヲ風ガ吹テチラスワイ 鶯ガ惜ガツテナクノハダウリヂヤ」となっている。景樹が批判するのは「句調」や「調べ」を理解せ

ず、「野辺」ごとに来てみれば」を引き離して「野へ来て見レバ ドコノ野モ」と口語訳する宣長の解釈であることは間違いないが、それだけではなく、この歌の焦点がどこにあるかという問題であると考えられる。つまり、宣長が口語訳の末尾に敷衍した「鶯ガ惜ガツテナクノハダウリヂヤ」という解釈は、この一首が鶯の視点で詠まれた歌であるという認識に基づいている。これに対して景樹は、この一首を「旅ゆく人」が詠んだという観点から歌を解釈すべきことを提唱しているのである。歌の調べを歌の解釈に適用するという手法もさることながら、何に焦点を当てるかという点の方が本質的であろう。そのような視点の違いを顕在化させたものが、歌の調べという、歌人の資質に関わる要素であつたということは、宣長と景樹の注釈の根本的な相違を考える上で極めて重要な事柄であると言つてよからう。

第四として、春下・一二四番歌を見てもみることにしよう。

よしの川のはとりにやまぶきの咲りけるをよめる 　つらゆき

吉野川きしの山ぶきふくかぜにそこのかげさへうつろひにけり（春上・一二四）

岸なる山吹を吹かぜはさる水底までは至らぬを、同じく底のかげさへ散にけり、こはいかでとをさなくいへり。

○遠鏡に、吉野川ノ岸ナ山吹ヲ見レバ風ガ吹テチルガ其風デ川ノ水ガウゴクニヨツテ底ヘ移ツタ影マデガチツタワイといへるは非也。岸なる山吹はちらずはこそ、水のうごきに影は散たりともよみなすべけれ、本の花の散んには底の影も一つにちらん事論なし。水のうごくうごかぬを待べんや。かつしか聞んには三四句のあひだに浪めく事なくては詞もたらざるをや。

吉野川の岸の山吹に風が吹くと、水底の影までもが散っているの意である。景樹は水底に映った姿が散るという趣向を「をさなくいへり」と評する。これは中世歌論に頻出する評語であり、理想に近い詠み方を評する語として用いら

れる^(四)。景樹は岸の山吹と水に映る花の姿とがともに散る光景を「同じく」と記している。ところが、宣長は「川ノ水ガウグクニヨツテ」という言葉を敷衍した上で、水底の影までが散ったと解釈しているのである。景樹が指摘するように、岸の山吹が散っていないのであれば、川波のために水底の花が散ったと言えるけれども、もとの花が散ったのであるから水底の花までも散ったというのは道理である。波が立つ立たないは関係がない、もしそうであれば、「波めく事」が詠み込まれていなければ駄目だという景樹の判断は正しい。宣長の敷衍は蛇足に過ぎなかったということである。

第五として、夏・一六八番歌を取り上げることになろう。

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひちはかたへすゞしき風やふくらん（夏・一六八）

みな月はもとより熱暑にかれて水なきの名也。水なき河をみなせ川など云に同じ。さる水無月のつごもりいとあつき日しも、あすなん秋のふん月也ときくに、今夜しか秋と夏と行かはゞ、其秋の立くらんかたへは、やがて涼しき風や吹らんと秋涼をまちわぶるこゝろより、くれなん空をしかもおもひやれる也。

○遠鏡に云、今晚クレテユク夏ト来ル秋トイキチガウ空ノ通り道ハソノ夏ノ通ツテユク片一方ハマダ暑ウテ秋ノトホツテクル片一方ハスゞシイ風ガフクデアラウカイと云るは非也。此歌は只涼しきをのみねがひて思ひやりたる炎熱の情思ふべし。夜といはで日とあるにも心を付べし。されば暑き方には其意なければ、片一方ハマダ暑ウテの一句不用也。しか引とりたる訳解に例せば、最初にア、暑イ事哉などおきて、末の余意に其涼イ風ガコ、ニモハヤクワイテコイデとか何とか有べし。只秋夏交替の上をことわりたるものと思へるは其意を得ざるものにて、いはゆる歌をときころすの罪のがれざるに似たり。

夏の終わりの日に、空の上では季節がすれ違うというユーモラスな趣向を詠んだ歌である。景樹は詞書の指し示す意味から説き起こし、今日の「熱暑」という見地から詠まれた歌であると規定する。そうすると、『遠鏡』が下句の訳として「片一方ハマダ暑ウテ」とする解釈は不要ということになる。宣長もここには傍線を付しており、意図的に敷衍しているのである。景樹にすれば、その敷衍は蛇足なのである。景樹の論拠は二点ある。一つ目はこの歌は「熱暑」を厭い、「秋涼」を待ちわびる思いから詠まれたものであるという点、二つ目は詞書に「つごもりの日」とあって「夜」ではないという点である。前者は先に見たので、後者を問題にしよう。景樹は「夜といはで日とあるにも心を付べし」と述べているが、なぜこのようなことに言及しているのかを考えてみたい。すなわち、六月晦日の夜であれば、宣長が想定しているように、この歌は「秋夏交替の上をことわりたるもの」と考えることもできるが、そうではないからである。「今晚クレテユク夏」と訳しているように、宣長は明らかにこの歌を六月晦日の夜のことと考えている。景樹の批判はそこにある。景樹は丁寧にも宣長の訳を添削し、最初に「ア、暑い事哉」と始めて、末尾は「其涼イ風ガコ、ニモハヤクフイテコイデ」と結ぶことを提唱している。景樹は宣長が定めた土俵に上がってしっかりと勝負しているのである。潔い態度と言つてよからう。最後に宣長の解釈を「歌をときころすの罪」と断じるのは手厳しい表現ではあるが、あらゆる観点から見ても、景樹に軍配を上げざるを得ない。

景樹は『遠鏡』における訳や解釈を組上に載せて、これを表現に対する繊細な感覚で見直すという方式で修正した。歌学者としての宣長に対して、歌人としての景樹という構図である。古今集を最も優れた歌集と考えた景樹の気迫が勝ったということもできよう。

四、簡便な増補版―山崎美成『頭書古今和歌集遠鏡』

『古今集正義』の出版から八年後、山崎美成『頭書古今和歌集遠鏡』が世に出た。天保十四年である。『頭書』は判型は小本、二十卷全八冊、天保十四年十月に丁子屋平兵衛ほか七書肆より刊行されている。第一冊巻頭と第八冊巻末に山崎美成の序跋が置かれている。『頭書』には『遠鏡』の「例言」から本文まで、巻頭の横井千秋の序文を除いて、すべて収録されている。本文の頭書には注釈が記されている。『頭書』はほぼ全面的に『遠鏡』を支持する姿勢を貫いていると言つてよい。「頭書」とは『遠鏡』を補強するために付された注釈のことである。そのことは末尾に付された跋文に明らかである。

此遠鏡は鄙言^{ヒナコトバ}もてうつしとかれたること、まことに詞をみやびに証^{アカシ}を引いでたらん注釈^{チュウシャク}よりははるかにまさりて、童児^{ワラベ}にもとみにわきまへさとり易^{やす}く、今さらおのれなどが言^{コト}を答^{こた}へべきことかは。枕詞序語は歌をとくにくだくしとて聊^{さう}もいひ及ばされず。されば猶^{なほ}便^{やす}りよからんことをおもひて、くさくさの書^{フミ}どもより頭書^{グン}を加へたるは、諺^{コトワザ}にいふ蛇^{ヘビ}に足^{あし}をゑがけるの誚^{ソシ}りあらんか。天保みづのとの卯ふみ月よししげ又しるす。

俗語訳は注釈よりもすぐれたものではあるが、『遠鏡』には「枕詞序語」についての説明が一切無い。それゆえ、蛇足のそしりを受けることを覚悟の上で、注釈書から抜き書きをしたというのである。つまり、『頭書』は『遠鏡』をほぼ丸ごと収録した上で、プラスアルファとして注釈を加えたものということになる。

それでは、付け加えられたものはいかなるものなのか。美成はそれを「くさくさの書^{フミ}」と記すが、その実態を確かめてみることにしたい。すべての歌に頭注が付されているわけではないが、頭書欄に書き込まれた注釈の九十九パー

セントが賀茂真淵『古今和歌集打聴』であることが確認された。しかも、ほとんど文言も代えずに引用しているのである。ということは、ひとことで言えば『頭書』は、『遠鏡』に『打聴』を加えたものということになる。つまり、『頭書』は宣長の口語訳に真淵の注釈を加えた便利な作りである。そういう意味で、『頭書』は『遠鏡』受容史の上で、最も原書を尊重した注釈書であると言えよう。もちろん、当初の宣長の意図は、初学者のために注釈に代えて口語訳を付けたところに重点があるのであるから、極力排除した注釈を復活させるようなことは、あるいは『遠鏡』の精神に反するかもしれない。だが、簡便な注釈があるほうが絶対的に便利であるはずだから、注釈書としては完備している。『遠鏡』にも随所に宣長や千秋の注釈が付されていたことは銘記しておくべきであろう。

ここで、『頭書』に書き込まれた『打聴』の注釈に言及しておく。『頭書』は文字通り頭注形式の注釈書であり、小本という判型から考えても書き入れられるスペースは限られる。『頭書』の実態を見れば、『打聴』から抜き書きしているものは次のごとく分類できる。

(1) 本歌や典拠の指摘

(2) 難解箇所を通釈

(3) 主に延言・約言による語釈

(4) 冠辞(枕詞)・よせ(縁語)・掛詞の指摘

以上のように、一首の歌を読む上で口語訳のほかに必要不可欠と判断される項目について、きわめてコンパクトにまとめたものが多いことを指摘することができる。単に抜き書きしただけと言われればそれまでだが、頭書スペースという規格に合う注釈を抜き出すのは、案外自分で注釈を付すのと変わらないくらい難しいものである。それは他人の文章の適切な要約が困難であるのと同じである。『頭書』が頭書欄に絶妙な注釈文を含んでいるのは、著者の山崎美

成の学力レベルの高さに関わる問題かもしれない。いずれにせよ、宣長の口語訳と真淵の注釈という組合せによって、『遠鏡』は新たな読者を獲得したと言つてよからう。残存する板本の多さがそのことを雄弁に物語っている。おそらく、口語訳という方法に拘泥した『遠鏡』よりも、適切な注釈を適宜取り入れた『頭書』の方が初学者にとつて便利な注釈書だったのである。それは宣長が古道論を百首の歌に詠み込んだ『玉銚百首』よりも、これに注釈を加えた稲掛大平『玉銚百首解』の方が流布したことに同断である¹²⁾。

さて、『遠鏡』は先行注釈として契沖『古今余材抄』と真淵『古今集打聴』を対象にして、適宜批判を加えている。だから『打聴』の注釈は、必ずしも『遠鏡』に全面的に合致するわけではないのである。九十九パーセントにも上る『打聴』の注釈はいかにして『遠鏡』と共存しているのか。まず、歌本文に異同がある場合は、「打聞には」として本文異同を明記している。それは実質的に二首に過ぎない。次に、『遠鏡』が『打聴』の説を批判している場合であるが、その箇所については『打聴』の注釈はすべて不採用となっている。あくまでも『遠鏡』に寄り添って採不採の判断を下しているということである。それは極めて合理的な判断であつて、『頭書』の中で破綻することはない。注釈書として、整合性のある処置と言えよう。

次に、『頭書』に記された『打聴』以外の書き入れに問題を移そう。十例ばかりの箇所を整理すると、次の三つに分類することができる。

- (1) 宣長説の紹介 (一例)
- (2) 真淵説の引用 (四例)
- (3) 美成説の披露 (二例)

『頭書』があくまでも宣長の著作を基盤としているものであることを考えれば、(1) 宣長説の紹介があるのは当然と

言える。だが、それは意外に少なく次の一例のみである。

しき鳥の大和とつゝくるよし、くはしく石上私淑言に見えたり。

これは「しきしまの大和にはあらぬ唐衣ころも経ずして逢うよしもがな」(恋四・六九七)についての注である。宣長自身はこれについて、上句を序詞として訳を省略するという処置を取っている。訳出という点ではそれで十分かもしれないが、和歌研究という点では物足りない気もする。美成はどのように考えたのであろう。この直前には、『打聴』から「上は序にて、しきしまは大和の地名也。しきしまの大和といひて、日本の惣名にいひなして唐とはつゞけた」という注釈を抜き書きし、その後当該の一文を続けているのである。ちなみに『石上私淑言』は宣長の生前には刊行されることがなかったが、文化十三年になって大平門の斎藤彦磨によって江戸(須原屋茂兵衛・英平吉)で刊行されている。美成の師である小山田与清が序文をしたためているところから、美成にとって『石上私淑言』はなじみ深い研究書だったと思われる。なお、当該箇所は刊本『石上私淑言』巻二にある。

次に、(2) 真淵説の引用に言及したい。それは次の四例である。

○若草はつまといはん冠辞也。春のわか草はめづらしくつくしまるゝものなれば、夫婦にたとへたり。(春上・一七)

○あし引は山といはん為の冠辞也。あしび木のしび木は繁み木の謂也。さて山はさまゝあれど木の繁きをめづればすべて山の冠辞とはせしならん。(春上・五九)

○うつせみとは世といふ冠辞なり。こは頭しき身の命頭の身の世とつゞける也。古今集のころに下りては即蟬のもぬけに譬てはかなき意にもいひなしたり。(春下・七三)

○ひさかたとは天、雨、月、みやこなどいふ冠辞也。天のかたちはまろくてうつろなるを瓠の内のまろくむなしきにたとへて

瓠形ヒヤカガタの天といふならんとおぼゆ。久かたのひかりのどけき春の日にてふは、空のひかりといはんがごとし。(春下・八四)

この四例はいずれも冠辞(枕詞)に関する注釈であり、「冠辞也」の後ろは『冠辞考』からの引用である。『打聴』の該当箇所には、「冠辞考を見るべし」などといった文言があるものもある。美成は真淵の指示に従って『冠辞考』を参照し、それを『頭書』に引用したのと思われる。美成は、真淵―春海―与清―美成とつながる県門国学者であったので、真淵の指図は特別のものと考えたことであろう。

第三として、(3) 美成説の披露を考えてみたい。繰り返し述べたように、『頭書』は宣長の口語訳に真淵の注釈を組み合わせたものであつて、基本的には宣長と真淵の説が記されるだけである。そういった中で、二箇所だけ山崎美成本人のものとして披露された説がある。次の通りである。

○成案ずるに、ひさかたの説は久老が万葉考の日刺方ヒサスカタの意といへるがまされるやうにおぼゆ。(春下・八四)

○成案に、熟字を一義に用ふることと和漢ともにその例いと多し。左伝に賜諸侯使臣妾之唯命とあるは、臣と妾とふたつにあらす。源氏物がたりの雨夜の品定め条に、なつかしきつまこと頼んといへるも、妾のことにて、子の義にあらず。また令義解、随園随筆にも説あり。猶委しくは金杉日記にいへり。今は概略を云のみ。(秋上・二二四)

「成」は美成と考えて間違いない。八四番歌はさきに(2) 真淵説の引用のところで言及したものの続きであり、正確に言えば美成のオリジナルではない。真淵門弟の荒木田久老『万葉考概乃落葉』の説(「日刺方」)を紹介し、これに賛同の意向を表明しているに過ぎない。引用のパッチワークのピースの一つに過ぎないとも考えることもできる。だが、「成案ずるに」という編者が顔を出すのはそれなりの理由があるはずである。というのも、ここは「ある説に日刺方ヒサスカタの意といへり」として処理しておいてもよいところである。やはり、『冠辞考』を引用しつつ、これを訂正した

『万葉考槻乃落葉』の方がよりすぐれた見解であると判断したがゆえに、その判断を編者の責任のもとに表明したのだと思われる。ここには美成の国学に対する真摯な態度がうかがえる。

そういった国学者としての本領が発揮されたのが二二四番歌に関する注釈である。これは「萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてをゆかむさ夜はふくとも」の第三句「露霜」に関して、『打聴』に「露霜は所によりて露と霜と二つなるもあれど、こゝのさまにいへるは、秋更て露ながら霜をかねていふこと、万葉にみゆ。その時はつゆじもと霜をにぎりてよむ例也」とあるところを引用した後で、自説を展開するという次第である。要するに、二字熟語は両字がともに意味を有するのではなく、上の字のみに意味があり下の字はただ添えるだけの役割だということである。『金杉日記』には、「妻子」（樂府・源氏物語）「臣妾」（左伝）「風雨」（易）「岩木」（うつほ物語）の四例を出して考証している。それらの例に共通する要素として、如上の属性を抽出している。なお、『金杉日記』の当該箇所は天保八年正月三日条であり、この頃の美成の関心のあり所を知ることができる¹⁸⁾。ともあれ、『頭書』のこの箇所は珍しく美成が全面的に顔をのぞかせるところであり、いわば美成の肉声が注釈本文からうかがえるところであることを指摘しておくことにしよう。

以上検討したように、『頭書』は『遠鏡』に『打聞』を交えたものであるが、例外的にそれらの書籍以外にも適宜引用しているのである。それは『古今集遠鏡』受容史という観点から見れば補足に過ぎず、美成本人も言うように蛇足に過ぎないかもしれない。しかしながら、この『頭書』によって『遠鏡』は普及の次の段階に歩を進めることになったのである。近代になってからも『頭書』は文庫本サイズの二冊本として出版された。それは時として、本家の『遠鏡』を凌ぐ勢いであったと言つてよいかもしれない。

五、後進による総力批判―中村知至『古今和歌集遠鏡補正』

『頭書古今和歌集遠鏡』が出版された翌年に『古今和歌集遠鏡補正』が世に出た。天保十五年のことである。上下二冊より成り、『遠鏡』の中から五十五首を取り上げてコメントを付すというものである⁽⁴⁾。本書の趣旨は見返し題の左側に次のように記されている。

此書は源知至大人教授のいとまに古今集遠鏡の訳語のたらざる所あるをば補ひ、又漢の故事をよめる歌の解もらされたるをば悉く儒書仏書の中より揚て出所を明らかにし、いさゝか誤あるをば正して大人の友に見せられしを乞得て、今たび梓にゑりたるになん。初学の人々遠鏡を見る人、必読すばあるべからざるの書なり。

源知至は俗姓中村、庄内藩士で、同じく庄内藩士の白井固の門弟である。白井固が足代弘訓の門弟であるから、鈴屋派とは異なる系譜に属する。その中村知至が古今集を講義するかたわら、『遠鏡』の訳出の間違いを正し、漢籍に基づいた注釈を補ったものである。ただし、この注釈には他にも多くの人物が関わっており、必ずしも知至の単著とはいえない。そのあたりから確認していきたい。まず第一に、知至の師である白井固に「鏡の塵」という注釈書があったごとくであり、その自序が『補正』に掲載されている。次の通りである。

本居大人の古今集遠鏡を見るに、げにちかくうつされて、はたくちぶりなど心せられたる、いとめでたく、初学のとく心えやすくおぼゆるものから、ゐなかうどの都ことはならぬけには、とみに聞とりがてなるふしゝなきにしもあらねば、見るまゝにかいして、猶ものしれらん人にとはんとて也。さるはまがのひれとかのまがゝしき心ならで、歌学のためにこの鏡をいよゝあさらかに見まほしくてなん。

ことさらにちり打かくる遠鏡はらひて見せん人をこそまで

源固識

白井固が『遠鏡』の中の過誤を指摘することと、宣長が用いた当時の「都ことば」のニュアンスを正しく伝えるという二つの意図があるという。『遠鏡』の解釈の不備については後続する論難書が争つて問題にするところであり、とりわけ特徴があるわけではない。むしろ、興味深いのは後者である。宣長が準拠した当時の「都ことば」は「ゐなかうど（田舎人）」には不明なところがあるというのである。これは社会言語学的な問題であるが、当時は地方による方言はことさらにきつく、その上階層によつて用いる言葉も異なる。そのことを指摘していることは銘記すべきことである。それはともあれ、この「鏡の塵」に基づいて知至が『遠鏡』批判を記したのである。

それ以外にも足代弘訓や吉田令世、あるいは橘守部、天野政徳なども『補正』に参加している。そのことを守部は、次のように序文に記している。

もちの夜の月も、むら雲かゝりては、さやかならず。ますみの鏡も、ちりひぢゐては、あきらかならず。古鈴屋老翁のみがき出られたる、遠鏡なりて、千とせのむかしの、遠き世の歌の意も、中空の雲をはらひて、隈なき月を望むがごとく来しは、偏に老翁がいさになむ。しかはあれど、後より見れば、猶その鏡にも、のこる塵ひちなきにあらじと、ゆふ月夜、出羽^ノ国の庄内県、青雲の、白井^{カシ}【源固】の翁、その塵をいさ、かきよめて、すなはち鏡の塵と、名づけたる一卷を、をしへ子、天地の、中村知至にあたへられぬ。知至ぬし、其心ざしを嗣て、猶遣れる塵を掃ひそへて、二巻となしたるをば、今は甘とせあまりのむかし、足代弘訓ぬしに、訂さしめて、一たび定りぬ。その後又、かの遠鏡に引漏せりし、故事によれる歌のかぎり、其出る所の書どもを、詳に引そへたるをば、わが里へも齎来て、守部にもよみ聞せられき。そをこたび、書屋が乞けるまに、ゆるし与へられぬとなり。かゝれば今はさゝ残るちりもあらずして、更にみがける、ますみかゝみにむかふがごとく、はれし夜の月に望むがごとく、なりぬらむかし。

天保十四年五月

東都 池室 橘守部

この序文によれば、白井固―中村知至―足代弘訓―中村知至―橘守部の順に手を加えたことが知られる。それを書肆の要請で上梓に踏み切ったというわけである。このような経緯を経て成立した『補正』は、重層的に『遠鏡』への批判的言辞によって構成されている。前節で検討した『頭書』がほぼ全面的に『遠鏡』を支持する立場で書かれているのに対して、『補正』は終始、批判的な態度で臨んでいると言つてよい。近接した次期に出された『遠鏡』関連書に有機的なつながりがあるのか、それとも単なる偶然なのか、詳らかにしないが、相次ぐ出版はそれだけ『遠鏡』の影響が大きかったことを意味すると考えられる。『補正』を順に見ていきたい。

まず、春上・二番歌を見てみよう。

春立ける日よめる

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつけふの風やとくらむ（春上・二）

○袖ヲヌレシテスクウタ水ノ氷テアルノヲ 春ノ来タ今日ノ風ガ吹テトカズテアラウカ

知至ひそかにいふ。訳のことはげにちかくうつされたものから、もとより初学の心あさからんものにもせられたらめば、猶ときたらぬこゝちにこそ。袖ヲヌラシテスクウタ水とばかりにては、初学の心にむかし人のいかなることのならはしにか、さるわざはなせしなど、おもひて、作者の心を汲とりがてなるもありぬべし。このうたの、夏すぎ秋さりたるも、いっしかに冬さへ暮て春立来り、ひと、せのとく過しおもひを細にしらしむべきには、去年ノ六七月ノ頃ニハ涼ミナガラノ手ナグサミニ袖ヲモノラシテスクヒナンドセシ水ノ冬ニ成テハ氷ツテアルノヲ最早春ノ来タ今日ノ風ガ吹テ解スデアラウカ サテモく年ノ過ギ来ルノハ造作モナイモノヂヤマア

この歌に対する知至の批判は、歌の解釈そのものではなく、その解釈をいかに訳出に反映させるかということにある。「袖ヲヌラシテスクウタ水」という逐語訳では初学者には舌足らずで不親切だというのである。そのままでは古来の慣わしがあり、何かいわくありげに見えるといわけだ。私訳を試みているのは、初学者への弊害を取り除くためなのである。これは宣長が『遠鏡』で実践しようとした試み、すなわち初学者に対する配慮を重んじる精神を補足しようとするものであり、批判的に継承する意図がうかがえる。末尾に「サテモく年ノ過ギ来ルノハ造作モナイモノヂヤマア」などと、歌にない言葉を敷衍して歌全体を流れる「作者の心」を代弁したのも、単なる非難ではないことを雄弁に物語っていると言つてよからう。この嘆息にも似た心の声は、『遠鏡』の随所に挿まれる宣長の訳の延長線上にあるものだからである。ここに『補正』の基本的方針を読み取ることができる。この後に見る『遠鏡』批判はそのことを前提に把握する必要があるだろう。

次に、春下・一二七番歌である。

春のとく過るを読む

躬恒

梓弓春立しより年月のいるがごとくもおもほゆるかな（春下・一二七）

○古歌ニ梓弓春トツヅケテ読アルガ誠ニ月日ガ早ウ立テ 矢ヲイルヤウニ思ハル、春ニ成テカラマダ何ノマモナイニサテモく早ウ立タコトカナ

とし月といへるは、まことはとしの暮の歌なればなるべし。春の暮の歌にては此詞いかゞ聞ゆ。」

私に云、此梓弓といへるは、たゞ冠辞にして下の張と射るとを相むかへたる也。さのみ古事をふみてよめりともみえず。ことさらに古歌に云々などあるべきにあらず。かく冠辞を訳する時は前後の□□などせし例にたがひて、初学の間どふ事になん。又年月とあれば実は歳暮の歌なるを、誤て春につらねたりとするもいかゞ。作者躬恒撰者の一人にして己が歌を誤りて異部にいるべきや。よし後にあやまり入しとせんも、前のことばがきをもあやまりとせんか。凡詩歌の上には格調によりて

理路にわたらざること常に多し。か、はれりといふべし。

守部云、歳暮の歌とするはか、はれり。我國の詞には相つらねていひならへることは、上下の語一つは用あり、一つは用なきもの常に多し。古き文どもを見てしるべし。

「私に云」とは中村知至の言である。知至の論点は二つあり、一つ目は「梓弓」の機能であり、二つ目は歳暮の歌かどうかである。一点目は梓弓に続く詞章が古歌を踏まえて詠まれていることに對する反論である。たしかに、『遠鏡』原文では「古歌二」や「春トツケテヨンデアルガ」などの部分には傍線が引かれており、敷衍した文脈であることが明示されている。だから、必ずしも歌の表面に出す解釈ではない。つまり、踏まえられた先行歌があり、そのような歌が潜在的に存在するということを言っているに過ぎない。だが、そのことを割り引いても、あえてそのような歌を記す必要があるかどうか、疑問である。知至が批判するのは、「梓弓」が枕詞（冠辭）であることを指摘して、誤出しないことを指示しておきさえすればよいことである。それが初学者への配慮だというわけである。

次にこの歌を歳暮の歌とする説であるが、これを初めて指摘したのは『古今余材抄』である。契沖は拾遺集や古今和歌六帖には歳暮の歌として収録され、躬恒集にも師走の歌としてある。宣長はそのことを根拠にして、第三句「年月」と詠んでいるに結び付けて歳暮の歌としているわけである。これに對して知至は、躬恒が撰者であるから部立てを間違はずがないし、詞書から見ても春部であると反論する。歌は「格調」が大事であつて「理路」には深入りしないものだと言うのだ。そうして、「理路」にこだわった宣長の判断を「か、はれり」と断じる。この「か、はれり」とする評語は『補正』に頻出するものである。欄外に設けられた橘守部の評においても、追いつちを掛けるようにそのことを「か、はれり」と評している。歌の格調を見失つて、理路に拘泥する姿勢を非難するのである。

同様の批判は秋上・一八四番歌にも見える。

木の間よりも来る月の影みれば心づくしの秋はきにけり（秋上・一八四）

○木ノ枝ノ間カラモツテ来ル月ノカゲヲミレバ 広ウミルトハチガツテ 少シヅ、ホカ見エネバ サテ／＼シンキナモノヂヤ 是ヲミレバ今カラ惣体モノゴトシンキナ秋ガ来タワイ」

師云、訳のことわりとみに心得がたくおぼゆ。こゝはまた初秋の歌なれば、落葉などはせぬものから、夏木立のしげりたりしも今は秋といふきざしには、おのづから木の葉もすき、かつは月の光も少しはたがひて、さやかなるかたになり、木の間よりも来るかげを見て、今よりはやうやくに心づくしなる秋かよと、はつかなることに感じて、行末をさへ縁におもひやりてよめるなるべし。さらば今秋になりてきら／＼しくさやかなる月も、広う見るとちがつて、少しづゝほか見えねばにては、木の間といふにふかくかゝはれるにあらずや。

守部いふ、月を心をつくすのみにして、木の間といふは夏の頃は月にかゝらぬ樹も、秋と成ては月にかゝれる所などより、すぐに木の間とはいへる也。されば木の間と云を軽く見べき所也。新訳見得たり。

一八四番歌における初句「木の間」をめぐる議論である。宣長は上句を敷衍して「広ウミルトハチガツテ 少シヅ、ホカ見エネバ サテ／＼シンキナモノヂヤ 是ヲミレバ今カラ惣体モノゴト」という説明を付け加えている。『補正』はこれに反論する。この歌は初秋の歌であるから、落葉はしないものの夏木立の繁茂というわけでもなく、秋の兆しを感じられるような風情であるということが大事であつて、「木の間」という表現を拡大解釈し、木の葉に遮られてあまり月が見えないことが「心づくし（シンキ）」を助長するととらえるのは「かゝはれる」というのである。和歌を解釈する際に、和歌の言葉に徹底的に寄り添つて、そこから新機軸を打ち出そうとする宣長を、辞句に拘泥し過ぎると切つて捨てるわけである。守部もこれに対して「木の間と云を軽く見べき所也」と述べて、賛同の意を表明してい

る。守部は「木の間」よりも「月に心をつくす」ということが歌の趣意であると考えているのである。なお、「師」とは白井固であり、この項目全体が固の見解であることを意味している。このことから、理路に拘泥する姿勢への非難は中村知至の発案ではなく、すでに白井固が評釈した時から始まっていたことがわかる。

第四として、秋上・二三〇番歌を取り上げてみよう。

女郎花秋の、風に打なびき心ひとつを誰によすらむ（秋上・二三〇）

○女郎花ガ秋ノ野風ニナビクガ 誰ニ心ヲヨセテアノヤウニナビクヤラ

心ひとつはたゞ心といふことなり。」

私に云、かくてはいかにぞや聞ゆ。又心ひとつはたゞ心といふことなりとは、いかなる故にか、しり得がたし。われおもふに、秋の野風といふに吹かたのさだめなきけしきをいひて、かくさだめなく打なびくは実情のうすき事よ、人は真情のたゞ一つなるものなるを、其たゞひとつなる心をあまたの人になびきよする本心や、など女のうへにとりなして歌とせる也。さればまた例の、

アノ女郎花ガ 秋ノ野風ノ吹マ、ニ ソチラコチラト誰ガ方ヘモ上^ッハベニバツカリ打ナビキ氣ノシレヌウハ氣ナ女ヂヤ。サ
レド人間ノ実ナ心ハ唯一ツナルモノヲソノ本ノ心ハ誰ニヨスルデアラウ

かく見る時は、ひとつはたゞ心といふにはあらざるべし。こゝろひとつをの、をもじ、なるものを、のをの如くおもく見べきなり。

天野政徳云、新説宜なり。

守部云、宣長解たらず。新説見得たり。弘訓の両点宜也。心ひとつはおもひ一つといふがごとくして、ひとつといふに用あり。

この歌は訳と注釈にそれぞれ論点が一つずつある。『遠鏡』はこの歌を基本的に叙景歌と解釈し、俗語訳においても

それが反映している。これに対して知至は「女のうへにとりなして歌とせる」という。すなわち、女郎花に浮気な女の面影を見て、それを二重写しにこの歌を解釈するのである。もちろん、そこには女郎花が女、風が男という見立てが存在するごとくであるが、それは古今集成立当時にはすでに共有されていた。そのことを明示すべきというのが知至の反論の一点目である。二点目は『遠鏡』の注釈部分で第四句「心ひとつ」を単に「心」と言い換えているところである。これに対して知至は「たゞひとつなる心をあまたの人になびきよする」と解釈し、「ひとつ」と「あまた」という歌には顕在化しない対比があるということを想定する。そうして、この隠れた対比を踏まえた上で、第四句を「唯一ツナルモノヲ」と訳出し、逆接的に接続させるのである。

知至が指摘するこの二点は問題としてつながっている。つまり、女郎花が風に靡く姿の背後に多くの男に靡く女の姿をだぶらせるからこそ、「心ひとつ」という表現が重要になってくるからである。『遠鏡』が実にあつさりとした訳になってしまったのは、宣長の認識が歌のイメージの幅と奥行きを小さく見積もってしまったからである。知至の私訳の紙背にはそのような主張があったと思われる。なお、これに対しては天野政徳や橘守部、そして足代弘訓もまた賛同している。とりわけ、守部は「ひとつ」という言葉に「用（効果的な働き）」があると述べている。

『古今和歌集遠鏡補正』は編者である中村知至一人の著作ではなく、知至を中心とした歌学者の総力を結集して『遠鏡』を批判したものである。中には批判のための批判のようなものもあるが、それは『遠鏡』が批判するに値する偉大な注釈書であることを意味している。それはまた宣長の次世代による『遠鏡』受容の姿でもあるのである。

六、一点突破の批判——中島広足『海人のくぐつ』

中島広足は肥後藩士にして、長背真幸門の国学者歌人である。真幸が宣長門であるから、宣長直系の国学者という

ことになる。だが、広足は近世後期から幕末にかけて、危機の時代を縦横に活躍した活動家という側面もあり、さまざまな人物と積極的に交流している。それゆえ、宣長の孫弟子であるという事実は余り重く見ない方がよい¹⁵⁾。中島広足は『遠鏡』に対してまとまった形で批判をしているわけではない。だが、折に触れて宣長説を修正したり、反論したりしているのである。ここでは嘉永三年刊『海人のくぐつ』の一項を見てみたい。対象となるのは古今集・冬・三二五番歌に対する『遠鏡』の訳および注釈である。

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば（冬・三二五）

○山里ハイツデモサビシイガ 冬ハサベツシテサビシサガマシタワイ 人ノコヌ事ヲ人目ガカレルト云ヂヤガ 今マデハタマク 見エタ人目モカレル 草モ枯^レタニヨツテサ カレぬと思へば、たゞかれぬればといふに同じ。思に意なし。此例多し。

宣長のこの解釈に対して、広足は「〇とおもへばといふ詞」という項目で、次のように反論している。

今按に、此説はひがごとなるべし。此歌にては、思へばといふ詞眼目也。そは人めもかれ、草もかれはてぬる冬の、身にしみてさびしくおほゆる意也。此思ふは、必しもふかくおもひめぐらす意にはあらず。たゞ身にしてみてしかおほゆるをいへる也。もし人こゝろなからんには、人めのかれても、草のかれても、さびしくもあるべからず。山里のいつもさびしき中にも、人めも草もかれて、ことに冬のさびしくおほゆる心、やがておもふといふ詞にあたるなり。よく味ふべし。是を訳せんには、やがて、草モ枯タト思ヘバサ、として、こともなかるべし。

広足は、この歌の中で「思へば」という表現が一首の「眼目」であるとした上で、これを「草毛枯タト思へバサ」とでも訳出するのがよいと対案を提示する。広足の主張の拠所は、「思ふ」という語には、「ふかくおもひめぐらす意」と「たゞ身にしみてしかおぼゆる」意と二つあって、この歌では後者に当たるといふのである。つまり、「思ふ」には「思考」の側面と「感情」の側面の二面があるということであろう。たしかに語義および用法を検討すれば、「思ふ」には「思考」と「感情」の二面があり、ここは上句の「冬のさびしくおぼゆる心」に通底する「思へば」であるから、訳出が不可欠であるとする議論には説得力がある。

広足の反論の周到な点は、ほかの多くの用例を吟味しているところである。しかも、広足は用例をすべて古今集から取って、反証を挙げている。

さて例おほしといはれたる、其例ども、皆此おもへばといふ詞眼目なる事、左にあげたる歌どもを見てしるべし。

古今「ゆくとしのをしくも有かなますかゝみ見る影さへにくれぬとおもへば」

遠鏡、此結句の訳には、此ヤウニオイクレテイクト思へバ云々、と思といふ言をそへられたるを見るべし。

同「物ごとにかぞかなしきもみちつゝうつろひ行をかぎりとおもへば」

同「秋風にあふたのみこそかなしけれ我身むなしくなりぬとおもへば」

此二首の訳にも、思へばといふ言をそへられたるよろし。さてはじめの歌の訳のあたらしめをしるべし。

広足が挙げた例では末尾の「思へば」に対して、宣長はこれを省略することなく訳出しているのである。これらの歌は、三句切れ（二句切れ）＋「と思へば」により構成され、意味的には倒置型という点でも、三一五番歌と共通性がある。この三例は「をし」や「かなし」といった感情の「思へば」なので、上句との連関により訳出が不可欠であるとする主張は正しい。そして、そのことを宣長自身が実践しているとする議論は導出過程の批判としても正しく、反証

として完璧と言つてよいだろう。論敵の用いた証拠を逆用するのであるから、宣長が読めば、これにどのように反論するか、興味深いところである。

広足が用意周到なのは、ここで終わるのではなく、古今集以外にも用例を求めて、広く古典和歌の詠み方として定式化しようとする点である。次のような用例を並べている。

六帖「入日さす時ぞかなしきむらとりのおのがちり／＼なりぬとおもへば

後撰「さ、がにの空にすがけるいとよりもこゝろぼそしやたえぬとおもへば

同「ちはやぶるかみな月こそかなしけれわが身しぐれにふりぬとおもへば

拾遺「有明のこゝちこそすれさかづきに日影もそひていでぬとおもへば

後拾遺「おもふこと今はなきかなでしこの花さくばかり成ぬとおもへば

これらの歌、おもへばといふ語を、はぶきても聞ゆるやうなれど、さては余情なくなりて、歌のあぢはひをうしなへり。かゝれば此語は其歌の眼目なる事をするべきなり。さて右の歌どもは、おほかた畢ぬのぬよりと、受て、既に然る事をいへる也。【うつろひ行を云々、一首はあらかじめいへることばなり。】

古今和歌六帖や後撰集をはじめとする勅撰集から用例を挙げ、それらの歌の「と思へば」の受けるものの共通点として、「畢ぬのぬ」の存在を指摘する。つまり、完了の助動詞によつて結ばれている事柄（既に然る事）を受けているというのである。このことは、すでに起こってしまったことを取り返しの付かない事柄として認識し、これを身にしてみて思い出すという定式が和歌の詠み方にあつたということを意味する。割書の「うつろひ行を云々」とは、先に引用した古今集・秋上・一八七を指し、「と思へば」の受ける中身に完了時制はないけれども、すでに確定した事柄であることを強調しているのである。つまり、「と思へば」には、完了した事柄を受けるという属性があるという法則

の確認である。

広足はこれ以外にも「と思へば」の受ける内容について追究し、次のように述べている。

また、未だ然らぬ事をおしはかりいふ意より、と、受たるは、ことに多きを、そはおもへばといふ語の要ある事、あらはに見えたれば、たれもうたがふことなかるべし。

古今「かつ見れどうとくもあるかな月かげのいたらぬ里もあらじとおもへば

同「みわの山いかにまち見むとしふともたづぬる人もあらじとおもへば

同「君がおもひ雪とつもらばたのまれず春より後はあらじとおもへば

同「せみの声きけばかなしも夏ごろもうすくや人のならんとおもへば

同「しら川のしらずともいはじそきよみながれてよ、にすまむとおもへば

同「万代をまつにぞ君をいはひつる千とせのかげにすまむとおもへば

これらの歌には、遠鏡の訳に、すべて、思へば、存スレバ、料簡ナレバ、などいふ語をそへられたるは、其意のあらはなるが故也。

「と思へば」は、完了した事柄だけでなく、未確定の事柄についても受けるという。それは推量の助動詞「む・じ」によって結ばれる事柄を受けて、未確定の事柄に思いを馳せ、そのことがある種の感情と響き合うという定式をうち立てるのである。このように多くの用例から一定の用法を抽出することは、宣長の批判からスタートしてはいるが、宣長の精神を受け継いでいると言うことができよう。

ところで、宣長が『遠鏡』の中で「と思へば」の訳出無用論を展開しているのは、本節冒頭に取り上げた三二五番歌だけではない。次のように、一三〇番歌において、すでにそのことに言及しているのである。

春を惜みてよめる

もとかた

をしめどもとまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば（春下・一三〇）

○春ヲ惜ムケレドモ モウシヨセントマリハセヌ 春ハモウタツテイヌル道へ旅ダチシタレバ トマラスハツヂヤ 霞は、たつの縁にいへる也。結句は、たゞたちぬればといふ意にて、思には意なし。すべて思又いふといふ詞を、そへていへる例つねに多し。思へばを、春の思ふと見たる説は、わろし。

通釈は省略に従うが、宣長は結句を「旅ダチシタレバ」として、「と思へば」の訳出を割愛した理由を説明している。この歌は「と思へば」が用いられた古今集の初出歌である。それにもかかわらず、広足はこの歌ではなく、三一五番歌を取り上げて反論を始めている。それだけではなく、この歌はとうとう最後まで用例に引かれることすらないのである。このことは考える意味がある。

この歌の場合、「と思へば」が受けるのは「たちぬ」なので、広足の分類に従えば、第一の範疇に属する。だから、そこに引かれていても不思議ではない。むしろ、当然用例として引用されるべきものと考えられる。だが、そのようになっていないのは、この歌は広足が「たゞ身にしみてしかおほゆる」と述べる感情の歌ではないからではないだろうか。つまり、「春霞かへる道にしたちぬ」というのは、春が帰路に発つ道に霞が立つという掛詞を用いた理知的な表現なのである。そういう意味で、この「思へば」は「ふかくおもひめぐらす意」、すなわち思考的側面で把握されるものである。広足の論理に従えば、思考的側面の「と思へば」は必ずしも訳出を必要とするものではないということになる。広足がこの歌を用例からあえて外したのはそのような経緯があったと考えることができる。一見筋が通っているように見える広足の宣長批判も、このようによく検討すれば論理の綻びが見えるのである。もちろん、このことは広足の『遠鏡』批判の瑕疵ではあるが、致命的な欠陥とまではいえない。大筋の法則は正しいのであり、例

外に対する説明を省略したに過ぎないと判断してよからう。

七、結 語

『遠鏡』は宣長没後もさまざまに受容され、いろいろと批判や修正を受けながらも読み継がれた。その平易な口語訳と適切な略注によって、幕末維新时期を越えても古今集が読まれる時には座右に置かれることが多かった。桂園派の残党が御歌所歌会を席捲していたことも幸いして、依然として古今集が歌人にとって正典であった。ところが、正岡子規が登場し、「歌詠みに与ふる書」(明治三十一年二月)を連載し出してから事態が一変した。「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」という発言は、大変な反発を受けるとともに強烈なインパクトを与えた。ある種のバラダイム・チェンジが起きたのである。古今集に取って代わって、万葉集が正典となった。万葉集はあたかも近代国民国家統合の象徴として機能したのである⁽⁹⁾。

もちろんその後も古今集は読まれ、研究もされた。金子元臣が『古今和歌集評釈』を刊行したのは、明治三十四年一月であった。何度も修訂を繰り返し返して増刷されたのであるから、世の中に受け入れられたと考えて間違いない。その総論に『遠鏡』は「良好の書」として紹介されている。近代に入っても享受されたということである。そして基本的にはその精神は受け継がれ、厳密に解釈しながらも、初学者のために口語訳を付すというシステムは現代に至るまで踏襲されることになるのである。

註(1) 『玉勝間』二の巻「おのが物まなびの有しやう」(『本居宣長全集』第一巻、筑摩書房)参照。以下、本稿所引の宣長の文章は筑摩版全集による。

- (2) 『排蘆小船』 五十九。
- (3) 『うひ山ぶみ』(オ)。
- (4) 岩田隆「本居宣長年譜」(『宣長学論究』、おうふう、二〇〇八年三月) 参照。
- (5) 拙著『本居宣長の思考法』(べりかん社、二〇〇五年二月) 第一部第五章「俗語訳の理論と技法―『古今集遠鏡』の俗語訳」参照。
- (6) 伊藤雅光「『古今集遠鏡』・『古今和歌集鄙言』間の剽窃問題について」(『国語研究』 四十五号、一九八二年二月) 参照。
- (7) 寛政七年正月二十日付横井千秋宛宣長書簡。
- (8) 寛政八年六月二十八日付伊達氏伴宛宣長書簡。
- (9) 寛政八年十月二十六日付本居春庭宛宣長書簡および「著述書上木覚」。
- (10) 滝沢貞夫編『古今和歌集正義』(勉誠社、一九七八年二月)「解説」参照。なお、『正義』の引用は天保六年刊本によつたが、清濁と句読点は適宜付した。
- (11) 『毎月抄』に俊恵の「ただ歌はをさなかれ」という文言が記されており、近世歌論においても頻繁に言及されている。
- (12) 拙稿「国学研究にとつて和歌とは何か―本居宣長『玉鉤百首』をめぐる」(『江戸の文学史と思想史』、べりかん社、二〇一一年十二月) 参照。
- (13) 『金杉日記』は『続燕石十種』第三卷(中央公論社、一九八〇年九月)に所収されている。
- (14) 山本淳「中村知至著『古今和歌集遠鏡補正』の訳文について」(『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』 三十三号、二〇〇六年三月) 参照。なお、引用に際して石川裕子他「中村知至『古今和歌集遠鏡補正』翻字と解題」(『文献探究』 四十六号、二〇〇八年三月) を参照した。
- (15) 白石良夫『江戸時代学芸史論考』(三弥井書店、二〇〇〇年二月) および岡中正行『中島広足の研究』(私家版、二〇一一年二月) 参照。
- (16) 品田悦一『万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典』(新曜社、二〇〇一年二月) 参照。

(たなか こうじ・神戸大学大学院人文学研究科准教授)